

3つのモデルと5つの現場レポートの読み解き・振り返り

モデルの読み解き・振り返り

まず、皆さんが“高齢者の生きがいづくりの場の創造”を楽しむ時に、先に紹介した3つのモデルの中からどのようなヒントを見いだすことができるのか、という読み解きの視点を、モデル開発現場の様を通して紹介しましょう。

「伝承遊びを柱にした生きがいづくりの機会・場の創造モデル」の開発現場（都市部）では、お手玉、あやとり、ベーゴマ、メンコ、おはじき、ビー玉、縄跳び、百人一首、空き缶の馬づくりなどを、有志グループがお年寄りから学び楽しみました。

こうした集いの会場（公民館等公共施設）を訪れる子ども達や家族連れが、自由に参加し、お年寄りから伝承遊びを学び楽しめるよう、その都度ポスターを貼るなどして、集いを開放しました。

また、集いを重ねる中で、是非地域の子供達や子育て中のご家族に伝えたい、との声があがった伝承遊びの楽しみ方（基本的なルールやバリエーション、コツ）をA4版やA3版の手作りパンフレットにまとめ、児童館などに配布し、自由に手にとってもらえるようにしました。

「散歩、地域の魅力発見を柱にした生きがいづくりの機会・場の創造モデル」の開発現場（都市部）では、有志グループが、集まってマチ歩きを楽しみました。口コミやチラシを通してその機会に参加してくれたお年寄りからは、目に付いた建物や風景などのいわれ、そこにまつわる今昔の話などを学び楽しむことができました。

史跡や名勝、名店など地域ではよく知られた場所にも、様々な暮らしの思い出が込められていたり、何気ない見落としがちな風景の中からそれぞれが拘っているモノや空間が披露されるなど、集いを楽しみ重ねる中で、地域の魅力を満喫できる散歩コースが創り出されていきました。そして、コースのマップをつくり、公共施設に配架してもらいまい、自由に手にとってもらえるようにしました。

「生活文化体験、交流を柱にした生きがいづくりの機会・場の創造モデル」の開発現場（農山漁村地域）では、ひとつの集落を中心に探訪を重ねながら、その集落がかつて暮らしを支えてきた生業（養蚕や炭焼き、出稼ぎ等）の知恵や技を、その道具や生業を反映した家の造りと合わせてお年寄りから学んだりしました。また、地の野菜などを使った家々自慢の味を堪能しながら調理法や食にまつわる暮らしぶり（地域の歴史）を学んだり、年中行事に参加させてもらいました。

こうした交流を通して、集落のお年寄り自身も、「どこにもあるようなもの」、「埃をかぶったようなもの」と言っていた埋もれがちな事柄が改めて地域の魅力として注目されるよ

うになりました。そして、探訪の度に、そうして改めて見つけだされた地域の魅力の写真やいわれ、そこに込められたお年寄り達のココロをスケッチブックにまとめ、集落の人々や来訪者が手に取ることができるようにしました。さらに自由に持ち帰ることができるようにと、スケッチブックにまとめたものをA3版のパンフレットに仕立て直したのも作製し、集落の人々や来訪者にお渡しできるようにしました。

1年に満たない時間の中で学べたことは、お年寄りが持つ知恵や技、そしてココロのごく一端にすぎません。それでも、十分楽しみながら、お年寄りに生きがいを持ってもらうことができました。地域に、楽しんだ成果を発信することができました。

都市部でも、農山漁村地域でも、お年寄りから楽しみ学ぶことができる素材はあります。それらは、見落としがちなものですが、「遊び・レクリエーション」を通すことで、光りをあてやすくなります。

モデルの試し方、楽しみ方は自由自在。例えば、集いの場をより楽しむことを重視するならば、楽しむ仲間の輪を広げるチラシやポスターと言った地域の人を巻き込む仕掛けの作製がカギを握るでしょう。また、地域に成果を発信することを重視し、楽しむならば、効果的で地域の人々が日常生活に反映させやすい媒体を作製すること自体を楽しむことがカギを握るでしょう。そんなちょっとした工夫が、楽しく、無理なく、高齢者の生きがいづくりの現場を創り出したり、今楽しんでいる活動をそうしたものへと変えて行くに違いありません。

現場レポートの読み解き・振り返り

これまで紹介した5つの現場レポートは、既存の地域活動、市民活動や行政の施策、事業の中で、高齢者がいきいきと活躍している、そんな生きがいづくりの現場の報告です。前半のモデル（開発の現場）が、はじめの一步を踏み出すところから手作りで生きがいづくりの現場を創造するものであったのに対して、現場レポートは、いずれも既に有る大きな、力強い取り組みの中での生きがいづくりの模様スポットをあてたものです。

いかにして高齢者が生きがいを獲得しているのかということでは、はじめの一步から手作りで現場を創ることと共通する部分が多く、そういう点からも様々な現場で参考にできるヒントを見いだしていただけだと思います。また、生きがいづくりを支援する行政や団体等の皆さんには、そのまま事業をより豊かなものにするヒントとして読み解いていただければと思います。

生きがいをもたらす、経験・知恵・技。5つの現場では、いずれも、高齢者が、自分の暮らしの経験やそこで積み上げられた知恵、技を活かして活躍していました。そのことで、大きな生きがいを得られているようでした。

このことは、3つモデルとも共通しています。自分の経験や知恵、技が、子ども達や若い世代の体験や学びを支えたり、同じ高齢者の暮らしを支えたりすることにつながっているという実感、確信。これが、ただ趣味を楽しんだり、新しい趣味や学習に挑戦することだけでは得られない大きなやりがいをもたらしているようです。お客さんではない、主人公として輝ける役割があることの実感は、自分の経験や・知恵・技が役に立っている、喜ばれているという実感と切り離して考えることはできない、と5つの現場は教えてくれます。

経験・知恵・技を生きがいにつなげる仕掛け。高齢者の経験や知恵、技を、生きがいにつなげる仕掛けにも注目していただきたいと考えています。それぞれの現場には、それぞれの仕掛けがありました。一度きりの機会ではなく、継続的な活動の中でより大きな生きがいを獲得するだけでなく、現場を支える主人公になっていく高齢者の背後には、それぞれの現場のキーマン達の創意工夫が見え隠れしています。

視点の持ち方や配慮といったちょっとした工夫から様々な資源のコーディネートといった仕組みまで、創意工夫＝仕掛けは幅広いものですが、キーマン達がどんな仕掛けをどんな風に施しているのかを読み説いていただければ、皆さんの生きがいづくりの現場が、ひと味もふた味も違うものになっていくはずです。

いずれの生きがいづくりの現場からもわかるように、高齢者の生きがいは、他者や社会に役に立つ、喜ばれることを通して得られる満足感や充足感、役割意識を基盤としているようです。このことは、高齢者の生きがいづくりへの取り組みが、高齢者個人を越えて、よりよい暮らしの場や地域づくりへとつながっていく、展開していく大きな可能性を秘めていることを示しているのではないのでしょうか。

現場レポートの読み解き・振り返りの最後に、そんな可能性を示している他の事例をちょっと寄り道して覗いてみましょう。

リハビリがわりに、少しずつ埋もれてしまった古道の手入れを楽しんでいた人に賛同する仲間が集まった「逗子ハイランドの会」(神奈川県) 同会では、仲間の輪が広がるに従って、草を刈り払うだけでなく、丸太を設置したりしながら遊歩道風に、その古道を蘇らせるまでに活動の成果を広げました。その軌跡は、小さな一歩から地域づくりへとつながる道筋を示してくれているようです。

東京の「生きがいの会」は、行政の生きがいづくり関連講座の受講生が中心となって発足したグループです。同会では、仲間が集い生きがいを追求する様々な活動を楽しんでいました。デイ

サービスセンターの運営委託の公募に手をあげたところ、見事受託。そして、メンバーは、福祉関係の資格を取得し、会はNPO法人格をもつ団体へと脱皮し、今では、地域福祉の拠点のひとつとして地域に大きく貢献しています。その軌跡は、個人的な自己実現から地域づくりへとつながる道筋を示してくれています。

このように、生きがいづくりから地域づくりへとつながる道筋は、長寿社会の主役である高齢者の持つ大きな力を改めて教えてくれます。

例えば、かつての生業の経験や知恵、技を駆使して、山村の暮らしぶりの復活を楽しむ「どんぐり村」(岩手県)は、メンバー全員が高齢者で、自らの経験や知恵、技を発揮して、炭窯やかつての作業小屋を模した小屋づくりを楽しんでいます。同村では、自分たちだけで楽しむのではなく、子ども達にも山の豊かさを伝えたいと、炭焼体験や森での遊びの機会も提供しています。そんな経験を振り返り、メンバーは「自分たちが遊びながらみんなに喜んでもらえる」、「あそこに行ったら面白かった、また行きたいとなれば、世のため人のためになる」と炭焼きや森の手入れに汗する喜びを語ります。中心メンバーの高齢者(キーマン)は、そんな取り組みを「ぼっくり逝くための生涯学習」だと笑いながらも、「草を刈らねば山に入れない。草を刈らねばムラづくりはできない」と言います。「ぼっくり逝く」とは穏やかではありませんが、生涯学習という、いわゆる生きがいづくりを越えて、自らの暮らしを見直し「山にあった、ここにあった暮らし」をもう一度取り戻そうとする自律的で主体的な取り組みを楽しんでいるようです。

このように、高齢者は、大変大きな力を持っています。そして、「遊び・レクリエーション」は、その力を引き出すきっかけとなります。

皆さんへのメッセージ

5つの現場からも、3つのモデルからも、そして、上記した取り組みからも、高齢者の経験や知恵、技が、高齢者自身の生きがいづくりをこえて、長寿社会を支える大きな力となる可能性が浮かび上がります。この可能性を現実のものとするためにも、経験や知恵、技が活かされ、喜ばれることを通した高齢者の生きがいづくりは、今後ますます社会的な意義を大きくしていくことでしょう。

高齢者の経験や知恵、技が活かされ、喜ばれる(言ってみれば「消費」される)場をつくる。高齢者の経験や知恵、技を活かし、喜ぶ人と高齢者をつなぎあわせる(言ってみれば「循環」をつくる)。こんな「消費」と「循環」をキーワードにした取り組みを、それぞれの好みや関心、個性、土地柄を活かして多くの市民が「遊び・レクリエーション」として楽しむ。そして、その経験をお互いに参考にし合う。そんな潮流をご一緒に創り出してみませんか。